日本キリスト教会　広島長東教会だより

# ミニバラ No.57

〒731-0135　広島市安佐南区長東 3-32-16

TEL/FAX 082-238-3459

2017 年 8 月発行

## 目からうろこが落ちる

**サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。**

**（使徒言行録９章９節）**

イエスを信じる者たちを脅迫し、殺そうと意気込んでダマスコに向かったサウロは、突然天からの光を受けて、地に倒れました。そこでイエス・キリストの声を聞いたのです。

サウロは地面から起き上がって目を開けましたが、何も見えません。彼はダマスコに連れて行かれ、そのまま三日間、目が見えず、食べることも飲むこともしないまま、深い闇の中で過ごしました。

地に打ち倒されたサウロが、天から語りかける声に「主よ、あなたはどなたですか」と尋ねた時、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」という答えが返ってきました。このことはサウロにとって、まさに天地がひっくり返るような体験であったにちがいありません。神を冒涜する者として処刑されたイエスが、いま生ける神として語りかけてきたからです。サウロはその時、自分がこれまで神様のためだと信じて人生をかけて行ってきたことが、神様のためどころか、むしろ神様に敵対する行為だったことを知ったのです。

サウロは、三日間ひたすら祈っておりました。彼は深い闇の中で、この先いったいどう生きていったらよいか、自分の人生をどうしていこうか、暗中模索の状態でひたすら神の導きを求めていたのです。

生けるキリストとの出会いを体験して、言葉に尽くせない衝撃を受けたサウロにとって、次に来ることは、自分の犯した罪におののくことでありました。「深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。…あなたが罪をすべて心に留められるなら、主よ、誰が耐ええましょう。」（詩編 130 編 1、3 節）ということを体験したのです。

特に犯罪を犯したわけでもない一般の人であっても、主なる神のみ前に立てば耐えることが出来ません。ましてクリスチャンを迫害してきた人物ならなおさらです。サウロが直面したのは、欠点を改めたら正しい道に立ち返ることが出来るというような、比較的簡単なことではありません。自分の罪はもはや自分で償うことが出来ないほど大きく、神様がそれを数え上げられたら、もはや自分は生きるすべがなく、神様の前に滅ぼされずにおられない、…ということであったのです。

しかし暗闇の中に一条の光が差し込んでいました。殺されたけれどもいま生きておられる主イエスはサウロに「起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる」と語って下さいました。サウロは神様に滅ぼされてしまうという恐怖と、それでも救いの道が用意されているのではないかというかすかな希望の中で、祈ることで神様の助けを求めつつ、三日間を過ごしたのです。そしてその間に幻が与えられました。アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるという…。

主イエスの命令を受けたアナニアがただちにサウロのもとに向かい、彼の上に手を置いて神のみこころを告げると、サウロの目からうろこのようなものが落ち、元通り見えるようになりました。これは、それまでのキリスト以外のものに心を奪われていたサウロが死んで、キリストから注がれる命によって復活したことを示しています。だからこそ、洗礼を受けてクリスチャンになることが出来たのです。サウロはこうしてキリストと一体となり、キリストの死と復活にあずかる者になりました。

いくらサウロであっても、この時から急に主にあって完全な人間になったのではありません。まだまだ試行錯誤の人生は続きますが、この時、決定的な一歩が踏み出されました。もはや後戻りすることはありません。

サウロにとっての信仰の出発点は、まさしく私たち皆にとっても信仰の出発点なのです。

**（2016 年 8 月 13 日の礼拝説教より）**

**牧師　井上　豊**